

グラフ

プライマリ・ケア漢方のすすめ

佐藤 寿一*

はじめに

日本漢方生薬製剤協会が2011年に実施した漢方薬処方実態調査¹⁾によると、約9割の医師が漢方薬を処方しており、処方の理由として、西洋薬では効果のない症例で漢方が有効(56.6%)、患者の要望(42.8%)、エビデンスが学会などで報告された(34.1%)などが挙げられている。また、漢方薬を処方する病態としては、こむらえり、急性上気道炎、便秘、不定愁訴・更年期障害、イレウス、など、使用する定番の漢方薬がある病態が上位に挙がっているが、漢方薬処方時に漢方医学的診断を行っている医師は約半数であった。すなわち、多くの医師は日常診療において漢方薬を処方しており、その有用性を認識しているものの、半数の医師は漢方医学的診断を行わずに漢方薬を処方しているという実態が明らかになった。

漢方では、まず、患者が訴える症状と表れている徴候から、患者が現在正常な状態から外れてどのような失調状態を来しているかを漢方的視点で診断する(この診断を“証”という)。そして、その失調状態を是正する作用のある漢方薬を処方したり養生法についてアドバイスを行っている。「漢方は効く人には効くが、効かない人には全然効かない」という話を聞くことがあるが、患者の証を考慮せずに漢方を処方(病名処方)したり証の見立

てを誤ると、期待する漢方の効果は得られないばかりか、かえって病状の悪化を招くことにもなりかねない。患者の証の見極めをしっかりと行えるかどうか、漢方の効果を左右する最も重要なポイントとなるのである。

今回のシリーズでは、プライマリ・ケアの現場で漢方診療を行う際に、患者の証の見立てを行うために少なくともこれだけは知っておくべきポイントに絞って概説する。

I. 漢方的視点とは

患者の病態の見立てを行う際には、西洋医学とは異なる漢方特有の“ものさし”を用いる。いくつか異なった“ものさし”があり、漢方診療においては、各々の“ものさし”を用いて評価し、それらの結果を総合して患者の病態を把握する。ここでは、基本的な“ものさし”として、陰陽(虚実・寒熱・表裏)、六病位、気血水、五臓を紹介する。

II. 陰陽の概念

陰陽二元論は古代中国から続く思想である。全ての事象は、それだけが単独で存在するのではなく、「陰」と「陽」という相反する形で存在し、それぞれが消長をくりかえし、また移行しあうという考え方である。表1に陰陽の例を示す。

陰陽の概念は、病の症状に当てはめることができる。陰証とは、新陳代謝が衰えて身体の熱産生が低下している状態で、患者は寒がり温かいものを欲する。高齢者など体力が低下した人が病になると、多くの場合陰証を呈する。一方、陽証とは、

— Key words —
プライマリ・ケア、漢方的視点、証、陰陽論

* Juichi Sato : 名古屋大学 医学部附属病院 総合診療科病院教授

表 1 陰陽の例

	陽	陰		陽	陰
自然	天	地	人体の部位	上半身	下半身
天体	太陽	月		四肢	体幹
昼夜	昼	夜		背面	腹面
季節	夏	冬		体表	内臓
上下	上	下			
浮沈	浮	沈			
生物	動物	植物			
性別	男	女			



実証		虚証
筋肉質・固太り	体型	やせ・水太り
積極的で疲れにくい	活動性	消極的で疲れやすい
良好	栄養状態	不良
つやがある	皮膚	乾燥
食べるのが速い 食欲旺盛 一日でも便秘すると不快	消化機能	食べるのが遅い 過食すると下痢 数日排便がなくても平気
暑がりて多汗 冬でも寒がらない	体温調節	夏ばてしやすい 冬の寒さに弱い
力強い	声	弱々しい
かかない	寝汗	かく



図 1 体質・体格からみる虚実

新陳代謝が盛んで熱産生が亢進している状態で、患者は暑がり冷たいものを欲する。小児や体力が充実している人が病になると、陽証になりやすい。

Ⅲ. 虚実の概念

内部がうつろでかすかな状態を“虚”（空虚）といい、内部に何かが充満していることを“実”（充実）という。また、虚証とは、体力が不足しており、抵抗力や病原に対する反応（闘病反応）が低下している状態で、実証とは、体力が充実しており、抵抗力や病原に対する反応が亢進している状態である。実証タイプの人と虚証タイプの人の特徴を図 1 に示す。

Ⅳ. 寒熱の概念

寒冷と温熱は、病態を表現する対立する概念である。冷えや火照りといった自覚症状、触って冷たく感じる、あるいは熱く感じるといった他覚所見から判断される。症候から寒熱を見分けるポイントを図 2 に示す。温めると具合がよくなるものは寒証、冷やすと具合がよくなるものは熱証である。

Ⅴ. 表裏の概念

表裏とは、闘病反応が起きている体の部位を示す。“表”は、皮膚、皮下組織、筋肉、四肢、頭部、鼻、関節など身体表層部のことであり、これらの部位

熱証		寒証
熱感 はてる	自覚症状	寒気 冷える
赤色	顔色	蒼白
乾燥	舌苔	湿潤
強い	口渴	少ない
濃黄色	尿の色	透明
強い	便臭	乏しい

図2 病気の性状からみる寒熱

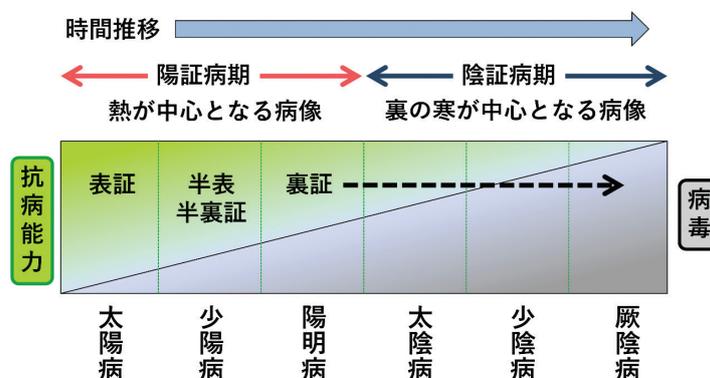


図3 六病位

で闘病反応が起きていると表証という。“裏”は、消化管や腹部内臓など身体深部のことである。“表”と“裏”の間の部分は“半表半裏”といい、口腔～胃、肺、気管支、心、肝など横隔膜付近にある臓器がこれに該当する。病の原因となる病邪は“表”から体内に侵入し、次第に体内深部に入り込んでいく。したがって表裏は病気の進行状態を示している。

VI. 八綱弁証とは

八綱とは、陰陽、虚実、寒熱、表裏の4組の対立概念のことを指す。弁証とは、病因病機を含めた病全体の総合分析をすることである。陰陽は虚実、寒熱、表裏の上位概念で、表証、熱証、実証はいずれも陽証で、裏証、寒証、虚証はすべて陰証である。表裏で病気の部位(進行状況)を、寒熱で病気の性質を、そして虚実で闘病反応の状態(病

勢)を診断することを八綱弁証という。2×2×2の8通り、すなわち「表熱実」・「表熱虚」・「表寒実」・「表寒虚」・「裏熱実」・「裏熱虚」・「裏寒実」・「裏寒虚」に分類される。

VII. 六病位について

病邪が身体表層部から身体深部に入り込んでいく経過と症状の変化を、6つのステージに分けたものを六病位という(図3)。6つのステージは経過順に、太陽病、少陽病、陽明病、太陰病、少陰病、厥陰病と呼ぶ。罹病初期は抗病能力(正気という)が強いが、病の進行とともに抗病能力が衰え、病邪が力を増してくる。前半の3ステージは陽証病期で、熱が中心となる病像を呈す。そして、後半の3ステージは陰証病期で、裏の寒が中心となる病像を示す。

各ステージの漢方的特徴と主要症状を表2に示

表2 六病位の各ステージの漢方的特徴と主要症状

ステージ	漢方的特徴	主要症状
太陽病	かぜの引き始めなど、病邪が体の表在組織や身体上部にある状態	悪寒、発熱、頭痛、項背部痛、鼻汁、関節痛、筋肉痛
少陽病	かぜをこじらせた時など、病邪が身体表部からやや内方に侵入した状態で、未だ身体深部には達していない状態	往来寒熱(弛張熱)、口苦、口乾、嘔気、食欲不振
陽明病	病邪が身体深部に移った状態	高熱持続、身体深部の熱感、腹満、便秘、口渴
太陰病	消化機能が低下し、気力と体力が低下した状態	腹痛、下痢、腹の冷え、食欲不振、全身倦怠感
少陰病	さまざまな臓腑の機能が低下し、全身の疲弊が著しい状態	強い全体倦怠感、嗜眠傾向、四肢の冷え、未消化の下痢
厥陰病	全身の臓腑の機能が著しく低下し、重篤な状態	意識レベルの低下、呼吸困難、真寒假熱(寒が極まり熱証のように見える病態)

す。太陽病では、葛根湯、麻黄湯、桂枝湯など体を温める作用の強い漢方薬を用いて、身体表層部にある病邪を発汗とともに追い出す治療を行う。少陽病では、小柴胡湯などの柴胡剤(柴胡と黄芩を主要構成生薬とし、抗炎症効果を有する)を用いて、病邪を鎮める治療(清熱・和解という)を行う。陽明病では、裏すなわち消化管に移行した病邪を体外に追い出すために、瀉下作用のある芒硝と大黃を含む承気湯類などを用いて、敢えてお腹を下す治療を行うこともある。陰証病期は、抗病能力が低下しており、病邪を叩く治療はさらなる体力

の低下を招くため行わずに、体力を補い、体を温める治療(温補療法)を行う。

以上、漢方の基本思想の一つである陰陽論を中心に概説した。次回は、もう一つの漢方の基本思想である気思想について紹介したい。

文 献

- 1) 日本漢方生薬製剤協会：漢方薬処方実態調査 2011. 2023年10月7日閲覧 <https://www.nikkankyo.org/serv/serv1.htm>
- 2) 日本漢方医学教育協議会編：基本がわかる漢方医学講義. 羊土社. 2020年